ヨコハマアートサイト
Yokohama Art Site

特集

自然をあるく

vol. 029
2021

田谷山 定泉寺「田谷の洞窟」入口
（さかえegaoプロジェクト「egaoフェスティバルvol.9」田谷の洞窟リアル参拝ツアー）
※洞窟は撮影禁止ですが、取材のため許可を得て撮影しています。

特集

自然をあるく

a.

b.

レポート1

egao フェスティバル vol.9

福祉×アート×地域のおまつり

架空の生き物を想像する

穏やかな秋晴れのなか、福祉とアート、そして地域をつなぐおまつり「egaoフェスティバルvol.9」が本郷台駅前にて開催された。おまつりを楽しむ人々の中央には、大きな龍のオブジェが12メートルもの体を披露している。この龍のオブジェ《○○に龍現る》(彫刻家ASADA)は、最初は骨組みだけだったが、横浜市栄区民文化センターリリスで開催されたフェスティバルのPart1と、春日神社でのイベントにて、訪れた人たちが飾りつけをして創り上げられたものだ。龍はその後、田谷の里山、田谷の洞窟にも巡回した。龍がまとう色とりどりの布や毛糸に、この作品に出会ってきた人たちの想いが現れているようだ。

フェスティバルのPart1では龍のほかに「架空の生き物大集合」をテーマとしたアート作品が、福祉施設のメンバーや地域の大人たち、子どもたちなどから集まり、会場には106点ものさまざまな生き物がその多様な姿を見せていた。

アートで地域と自然を伝える

Part2 として行われた今回のおまつりは、「田谷の洞窟とつながる」「本郷台駅前に龍現る」と題して行われた。「田谷を知ろう!」コーナーでは、バーチャル参拝として3Dメガネを通して映像を観ることができる。さらに、実際に田谷の洞窟へ行くツアーも開催された。参加者は駅前からバスで洞窟のある定泉寺まで移動し、田谷の洞窟保存実行委員会の田村裕彦(やすひこ)さんが現地で解説をしながら洞窟内を巡った。ろうそくを灯し、洞窟内に彫られた細やかなレリーフを一つひとつ観ながら歩く

横浜には海もありますが、

里山を始めとした豊かな自然も有しています。

自然とともに活動を行うみなさんにお話を伺いました。

レポート1 egaoフェスティバル vol.9

レポート2 森の美術展「Laboratory of forest art」

レポート3 舞岡公園 案山子まつり

d.

c.

a.《○○に龍現る》(彫刻家ASADA)の頭の部分

b.田谷山 定泉寺「田谷の洞窟」内部
※洞窟は撮影禁止ですが、取材のため許可を得て撮影しています。

c:落語「月とおだんご」(にこにこ亭憲吾)

d:染色ワークショップ

時間に心が落ち着く。

フェスティバルでは、洞窟の土から作った釉薬(ゆうやく)を使った焼き物や、洞窟をモチーフにしたポストカードなどの作品も並んだ。また「We×アーティスト」という企画では、栄区ゆかりのアーティストが福祉事業所など3つの場所に訪れ、参加者とともに龍をイメージして作成した作品が観客にイマジネーションを投げかけた。作品だけではなく、栄区生まれの素材を使ったワークショップも充実した。田谷の里山で採れた栗の葉で手ぬぐいを染める体験や、栄区発祥である竹かご「パイスケ」をその場で編む体験、また火を囲んでの焼きマシュマロ体験、おもちゃや雑貨、缶バッチなどの手作りワークショップなど、子どもから大人まで栄区の魅力を満喫した。さかえegao プロジェクトに参加する福祉事業所によるパンやスープなども販売され、食欲をそそる香りが漂っていた。野外ステージでは、ダンスやギターの演奏から、落語や漫才まで、地域の人たちのパフォーマンスが次々に繰り広げられ、場内を盛り上げた。

楽しい思い出の中で出会うこと

代表の大平由子さんは「このフェスティバルには障害のある人もない人も、子どもも高齢者も関わっていますが、アートを介して一緒におまつりを楽しんでいます。楽しい思い出の中で互いが出会い、支える／支えられるという関係ではないフラットな関係が生まれることが重要だと思っています。また、栄区にはこんなに豊かな自然や文化財があるんだ、アートって身近で楽しいものなんだと感じるきっかけになれば嬉しいです」と語る。

おまつりを通して福祉や地域、アートに出会うことで、ふだんの生活のなかにあるそれらに改めて目を向ける機会になっている。

さかえegao プロジェクト
http://ega-oproject.com/contents/top.html

レポート2

森の美術展
「Laboratory of forest art」

森の中でアートと出会う

森がどんなふうに見えるか

GROUP 創造と森の声は、里山の保全活動と森を舞台にした野外美術展や、森の素材を楽しむワークショップ、森を創造の場とした音楽や劇などの自由な企画を行っている。今回、向かったのは森の美術展「Laboratory of forest art」。森の中で木々を踏み分けて歩くと、さまざまな作品が立ち現れる。互いに通じ合う木々から想像を得た《木々のコミュニケーション》（原田曉）や、森の土を入れた鉢から年間を通して雑草が育つ《静かに覚める2020-2021》（小林ナオコ）、コロナ禍を心配して街へ出た“オオモリモリ”を“ 塔人間” が助けにきたという物語を表す《助っ人 塔人間》（石黒和夫）など、アーティストのさまざまな視点から森が捉え直され、表現されていた。観客は一つひとつの作品を観るたびに、自然の見え方が変容していく感覚を受ける。

自然の声を聞くことから

アーティストであり、美術展の企画を担当した原田曉さんは本展について「自然の豊かな創造力を前にすると、アート作品は容易に埋もれてしまうんです。そんな中でアーティストは自然に耳を傾けながら学び、自身の表現を生んでいます。作品を外界の要件とどう融合させるかを考えていくことが難しさでも、面白さでもあります」と語る。当初は野外展示を目的として立ち上げた企画だったが、そのように作品をつくっていると、自然を勉強することが必要になり、倒木を片付けたり、虫から木を守ったりと、本格的な保全活動につながったのだという。事務局代表の石山克幸さんは「自然を守るといっても、何をもって守ることになるのか、正解があるわけではありません。自然から学びながら、自分にできることを行っています」と語る。創造することが自然を学ぶことにつながり、また自然から創造を学ぶという、アートを通した自然との共生がそこにあった。

a.

b.

c.

a.《木々のコミュニケーション》（原田曉）
b.《静かに覚める2020-2021》（小林ナオコ）
c.《助っ人 塔人間》（石黒和夫）

GROUP創造と森の声
https://morilab.amebaownd.com/

レポート3

舞岡公園 案山子まつり

田園風景にならぶかかしたち

横浜の原風景「谷戸」

戸塚駅からバスで10分ほど、大通りから階段を上がると緑生い茂る木々の中に細い山道が伸びている。雑木林をしばらく歩くと視界が突然明るくなった。そこは小高い丘の上で、眼下には田園風景が広がっている。この「谷戸（やと）」と呼ばれる地形を保つ、ここは「舞岡公園」だ。耕作放棄で芦原になっていた土地を、1993年の開園まで約10年間かけて、横浜市と市民団体が再生し、その風景を取り戻した。現在はNPO法人 舞岡・やとひと未来として雑木林や田畑の手入れなどを行い、無農薬・有機栽培・手作業というスタイルを貫きながら、ボランティアとともに活動を続けている。また、次世代に引き継ぐための人材を養成する講座「谷戸学校」も開いている。副事務局長の安田さやかさんは、「ここを立ち上げた先代の苦労は計り知れませんが、私たちも次の世代に引き継ぐために、現状維持ではなく向上心をもって頑張っていきたいです」と語る。

農業を通したコミュニティ

丘から田んぼのほうへ降りると作業棟や、茅葺（かやぶ）き屋根の古民家や納屋のある「小谷戸の里」にたどり着く。休日には泥んこになった子どもや、農具を担いで歩く高齢者など、幅広い年齢層のボランティアが農作業を通して交流する姿がみられる。ここで農体験をした子どもたちが、やがて親として家族とともに参加し、当時の仲間に再会することもあるそうだ。登録しているのは約400家族、活動に関わる人数は年間で2万人にもおよぶ。

ここに通う人たちが毎年楽しみにしている行事の一つが9月に行われる「舞岡公園 案山子まつり」だ。今年は第29回目となり、38点ものかかしが展示された。展示期間にはその風景をカメラに収めようと多くの人が来園する。人気投票では1人2票で2,000以上の票が集まった。

のどかな田園風景の中で、老若男女がともに農作業をして笑い合う姿にゆっくりとした時の流れを感じる。無農薬・手作業での苦労は大きいが、その分、多くの人が関わり喜びを分かち合っているようだ。

a.

b.

a.案山子まつりのようす
b.茅葺屋根の納屋

NPO法人 舞岡・やとひと未来
横浜市戸塚区舞岡町1764
http://maioka-koyato.jp/

今回の取材先のみなさんからは「大切なものは守らないと簡単になくなってしまう」という言葉をしばしば聞いた。どのように守るのか、何をもって守ることになるのか、そのアプローチはさまざまだ。しかし、まずは自然に耳を傾け、その魅力を感じるということが共通しているようだ。アートは、自然と人とをつなぐ一助を担うことができるのかもしれない。

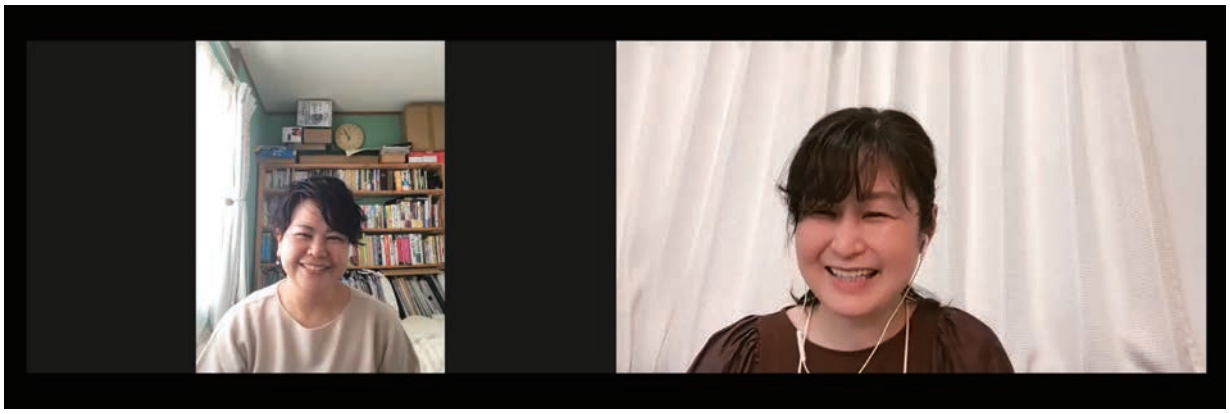
テーマ	子どもの日常とアート
ゲスト	大木智子（親と子のつどいの広場 しゅーくるーむ代表・NPO法人親がめ） 成澤朱未（蒼昊美術會 代表）
聞き手・進行	田中真実・森崎花（ヨコハマアートサイト事務局）
日時	2021年9月13日（月）
場所	オンライン

大木さんは、横浜市の子育て支援事業で就学前の子どもと保護者が遊びにくる「親と子のつどいの広場しゅーくるーむ」や、療育が必要な子どもや保護者の声を発信する「療育おやこネットワークｇｉｆｔ」という活動のほか、育てづらさを抱える保護者同士が、深刻になるばかりではなく、笑い合いながら子どもの面白さを共有できるようなおはなし会「大きなりんごの会」を主催しています。大木さんは「発達障害といっても中身は人の数だけあります。だから、この子はどういう子なのかということに目を向けるのが大事です。それは障害のあるなしに関わらないことだと思います。何が好きなのか知っていると楽しいよねという基本的な考えは、社会において大切な考え方だと思います」と語ります。

成澤さんは、蒼昊美術會で公募展の開催や水彩のワークショップの実施を通して、芸術の普及活動を行っています。ワークショップでは、塩やラップなど身近にあるものを使って楽しめる工夫をしており、今年は2歳から80歳までの幅広い方が参加しました。描かれた作品は画廊や神奈川県民ホールギャラリーでの公募展の一部としても展示され、鑑賞者は観るだけではなく投票できるようになっており、自分が好きな表現を考える機会にもなっています。公募展ではシンポジウムも開いています。成澤さんは「子どもたちには水彩の本来の美しさを体験してもらいたいと思っています。ワークショップの時間内でその良さが伝わるように、本物の画材を使用し、入念な準備を行っています。固定概念で絵を描くのではなく、自由に楽しんでもらえるように、子どもたちの発想に寄り添うことを大切にしています」と語りました。

ディスカッションでは、お二人が、子ども自身の発想をまず受け止めたり、固定概念から子どもをそっと解放したりするような寄り添い方をしていることが共有されました。ありのままの発想に耳を傾けることで、子どもたちが発揮する創造性について学ぶ機会になりました。

より詳しいレポートをヨコハマアートサイトのホームページに掲載していますので、ぜひご覧ください。



オンラインでの収録の様子（左：大木さん、右：成澤さん）

ヨコハマアートサイトラウンジとは
地域におけるつながりやネットワークを広げ、コミュニティの活性化を図ることを目的とし、横浜というまちでアートと地域の関わりについて考える交流と研修の場です。今年度はコロナ禍への対応として、収録したものを公開するかたちをとっています。

左：アサダワタル「緊急アンケート《コロナ禍における想像力調査 声の質問19》」（2020年、仲町の家）
右：友政麻理子《窓映画館、カーテンの夢》（2021年）撮影：小嶋宏維

足立区の地域密着型アートプロジェクト「音まち」のいま

寄稿：長尾 聡子

アートアクセスあだち 音まち千住の縁 事務局長の長尾聡子さんが、市民とアーティストが一緒に活動し、まちに新たな縁を生み出すアートプロジェクトのコロナ禍での実践について、お話ししてくださいました！

「アートアクセスあだち 音まち千住の縁」（通称：音まち）は、足立区千住で、市民とアーティストが一緒に活動し、まちに新たな縁を生み出すアートプロジェクトです。5路線が乗り入れるターミナル・北千住駅を擁する一方、古くは宿場町として栄えた名残をとどめ、新旧が入り交じる千住地域。音まちは、このまちにキャンパスを構える東京藝術大学と、足立区やNPO、東京都などが運営のタッグを組み、今年で11年目を迎えます。

2020年、未曾有のパンデミックで、人と会い、集まることが困難になる中で、前年から準備していた音まちの大規模プログラムも相次いで延期・中止となり、方針転換を迫られました。例えば、日本に暮らす在留外国人の人びとに焦点を当てる「イミグレーション・ミュージアム・東京」。当初は活動の集大成となる展覧会を開催予定でしたが、内容を再構成し、期間限定のオンライン美術館として特設ウェブサイトで公開しました（2021年12月、北千住BUoY（ブイ）で多国籍美術展の開催を予定しています）。

活動の多くがオンラインに移行する傍ら、日本家屋を活用した音まちの拠点「仲町（なかちょう）の家」は、一時閉室を経て、縁側と庭から再開。対面の場が少ない時期から、地域の文化サロンとしてひらき続けています。オンラインだけでない別の方法でつながろうとする2つの新しい営みも生まれました。美術家・友政麻理子の「窓映画館」は、家の中から窓に投影した映像を道や公園から眺める試み。文化活動家・アサダワタルは自粛生活を題材に19の質問を書き下ろし、声でやりとりする「声の質問」を開始。1年ほど試行を続け、2021年秋に回遊型野外上映会、コンサートとしてそれぞれ実を結びました。

大きく揺れる日常で一度立ち止まり、想像力を羽ばたかせる。約2年ぶりに音まちの実地開催の本番に立ち会い、まちの匂いや寒さまで懐かしく感じながら、表現を通して誰かと時間や空間を共有し合うことの豊かさにふれ直しています。

ながお さとこ　アートアクセスあだち 音まち千住の縁 事務局長

神奈川県生まれ。大学では音楽学、アートマネジメントを専攻する。在学中に「取手アートプロジェクト」（茨城県取手市）の人材育成プログラム「TAP塾」インターン、「art-Link 上野-谷中」（台東区）に運営スタッフとして参加。横浜市泉区民文化センター、東京アートポイント計画プログラムオフィサー、東京藝術大学音楽環境創造科教育研究助手を経て、現職。事務局（NPO）の経理や広報紙の編集などを担当しつつ、音まちの多様なプログラムに伴走中。

事務局うろうろ日記

ヨコハマアートサイト事務局は、今日も横浜市内の
あっちこっちへうろうろしています。

9月24日金曜日
横浜シネマリンにて、横浜シネマネットワーク実行委員会主催の「男はつらいよ」シリーズの映画と浪曲の2本立てを観る。映画は『純情篇』、浪曲は『寅次郎夕焼け小焼け』が上演された。映画で観た世界を思い浮かべながら、玉川大福さんの迫力満点の生の声を聴くと、まるで目の前に寅さんがいるような感覚になった。

10月16日土曜日
たけのまにて、美術保存修復センター横浜主催の「未来に繋ごう、皆んなの!! 横浜の!! 歴史・文化・芸術!! ～画家の気持ち～」の展示を観る。日本画のワークショップで子どもたちが描いた作品は、チューブの絵の具ではなく、自分で顔料と膠(にかわ)を練って作った絵の具で描かれていた。伸びやかな感性を受け取る。

10月31日日曜日
戸塚の里山にある横浜南フィールドアーチェリー跡地にて、音楽スペースおとむすび主催の「横浜の里山を歌う」に参加する。植物を観察し、名前や生態を学びながら1時間ほど歩いてまわる。森で出会った植物たちが登場する秋の歌を最後にみんなで歌ってみる。自然の移ろいに季節を感じながら、その心を歌で豊かに味わう。

11月4日木曜日
横浜下町パラダイスまつり実行委員会主催の「ハッピーティハール～ネパールのお祭りを祝う会」へ。ネパールの光の祭りティハールを日ノ出町の料理店「ナマステ・ポカラ」にて体験。富の女神を呼び込むため、窓を開け放ち、砂絵やロウソクが飾られた店内で、スペシャルプレートに舌鼓を打つ。異国に招かれたような気分に心温まる。

ヨコハマアートサイトとは

横浜市地域文化サポート事業。地域課題の解決にアプローチする文化芸術活動、文化芸術の持つ創造性をコミュニティやまちの活性化と結びつける活動、ヨコハマの個性ある文化芸術を市内外へ発信する活動を広く公募し、支援する事業です。

事務局・お問い合わせ

ヨコハマアートサイト事務局（認定NPO 法人 ST スポット横浜、横浜市文化観光局、横浜市芸術文化振興財団）
〒220-0004 横浜市西区北幸1-11-15 横浜ST ビル 208（認定NPO 法人ST スポット横浜 地域連携事業部 内）
TEL:045-325-0410　FAX:045-325-0414　MAIL:office@y-artsite.org　https://y-artsite.org

@Y_Artsite　ヨコハマアートサイト　ヨコハマアートサイトに関することを中心に、横浜市内のさまざまな地域文化について発信します。

季刊ヨコハマアートサイト vol.029
発行：ヨコハマアートサイト事務局　編集：認定NPO法人 STスポット横浜　編集協力：大谷薫子　取材・テキスト：小川智紀、森崎花、田中真実
デザイン：小池佑子　撮影（表紙・特集）：金子愛帆　印刷・製本：共進印刷株式会社　発行日：2021年12月28日
季刊誌についてのご意見・ご感想もお待ちしております。